2024年３月３日　第62回日本語教育方法研究会

タイ中等日本語教師を対象とするコンピテンシー・ベースの授業の試み

― 日本語運用能力向上と新たな教授法体験を目的とするテーマ学習の実践 ―

今井 寿枝・武田 素子（国際交流基金関西国際センター）

Ⅰ　研究の背景と目的

●コンピテンシーとは

変化が激しく複雑で予測困難な21世紀の社会を生き抜くために必要な力

※コンピテンシーの考え方の変遷については白井（2020）に詳しい。

●タイの中等教育段階で目指す５つのコンピテンシー

『仏暦2551年（西暦2008年）基礎教育カリキュラム』

❶コミュニケーション能力
情報発信力・受信力、自己表現力、交渉能力、情報処理能力等

❷思考能力
意思決定をするための分析的、統合的、建設的、批判的、組織的思考能力等

❸問題解決能力
問題処理能力、関係性構築能力、意思決定力等

❹生活スキル応用能力
生活適応能力、自己学習能力、勤労、社会調査、環境適応能力等

❺技術応用能力
情報技術活用能力等

国際交流基金日本語国際センター（2015）

●コンピテンシー育成を担う、タイ中等日本語教師のための研修

教師自身は コンピテンシー・ベース・ラーニング（Competency-Based Learning、以下CBL）の経験が無い

→ 日本語授業への取り入れ方がわからない →「教師主導」「文型中心」の教え方を続けてしまう（中尾2016）

学習体験を含む 教師研修の実施

2013～2021年　キャンプ事業における実施例

「プロジェクト型学習」体験（中尾2016）

生徒を対象とする学習の模擬体験

成果： コンピテンシー育成の重要性、プロジェクト型学習における教師の役割等について理解が深化

課題： プロジェクト型学習をCBLと同定し、日々の授業とは切り離された特別な活動であると理解

2022年

「CBL」体験　**今回の実践**

教師自身を対象とする学習の体験

特別なプロジェクトではなく、日々の授業を通して5つのコンピテンシー強化を実感できる体験を目指す

●本研究の目的（第一段階の達成状況について）

①日本語運用能力・コンピテンシーは向上したか
②CBLについての理解が深まったか

Ⅱ　実践の概要

●研修全体の概要

研修名	タイ中等教育教員 日本語・教授法訪日集中研修
期間	2022年9月26日～10月21日（約4週間）
参加者	タイ国内中等教育機関のタイ人日本語教師 30名（日本語レベル：参加要件はJLPTのN3）
主な目的	日本語のコミュニケーション能力の向上 新たな教授法、即ちCBLへの理解の促進
内容	・日本語授業（CBL）　・教授法授業 ・社会文化体験　・交流体験 ・ネットワークづくり　・自律学習支援

コンピテンシー向上・理解深化を図る流れ

第一段階 研修前半 （2週間）	**本研究** **コンピテンシーの向上・イメージ形成** **SDGsのテーマ学習** ①ジェンダーギャップ　②食品ロス	CBLについての振り返り
第二段階 研修後半 （2週間）	**・前半の体験を応用した実践** 実生活と教育現場の課題解決 **・体験の振り返りによるCBL理解の促進（メタ認知・整理）**	

●「CBL」理解を促進するための工夫

①研修参加者の日本語能力に合わせたCBL

	「生徒対象の学習」の模擬体験	**「教師自身対象の学習」**の体験
メリット	・生徒目線で学習の流れが体験可能 ・体験した授業を**現場で応用しやすい**	・自身の日本語能力、コンピテンシーの強化に**適した難易度で活動が行える** ・コンピテンシーを育成する過程で自分の中に起こる**リアルな変化を感じられる**
デメリット	・自身の日本語能力、コンピテンシーを強化するには活動の**難易度が低い** ・生徒の中に沸き起こる気持ちや変化を同様に感じられるわけではない	・教師向けの授業であるため、体験した授業を自身の現場で**そのまま実践することはできない。**

②日々の授業で行いやすい活動

- **スモールステップ**で行う
- 類似の活動を**繰り返す**
- テーマ・内容は、**実生活との結びつき**やすさに配慮する
- **振り返り**により、各自の学びを確かなものにしていく

→ 研修参加者が自分でできるようになることを促す

●学習の流れ

１週目　SDGsテーマ①：ジェンダーギャップ

日	テーマ　※コンピテンシー育成を狙った活動
1	**「学習の前」の振り返り** ジェンダーという考え方、社会の変化と個人の価値観 ※グラフ読解、一日の過ごし方の図の作成、ドラマ視聴、ロールプレイ、年表の読解、タイのデータの情報収集・分析
2	無意識の思い込み、職業のジェンダーギャップ ※ジェンダーイメージの分類、職業のジェンダーギャップの原因と結果についての意見文の読解・図による整理
3	家庭の役割分担・職業についての意識の実際 ※インタビューの準備・実施、結果の可視化、情報共有
4	学校におけるジェンダー問題の解決方法 ※記事の読解、情報のカテゴリー化、因果関係の可視化
5	**「学習の後」の振り返り**、**学習前後での意識の変化** ※第1回目の振り返りの内容との比較、自身の意識の変化についてのクラス内発表

テーマ学習の前に
テーマについての自身の知識・考えを振り返る

コンピテンシー強化の活動
- 問題を自分ごととして捉え、**背景や原因を推測し調べる**
- 思考ツールを用いて、仲間と協力して**因果関係や解決方法を考える**
- 多様な考え、価値観に対し、寛容な態度で接することを意識する

↓

日々の学習の振り返り

テーマ学習の後で
学習全体を振り返り、問題解決のために自分ができることを考えて書く

２週目　SDGsテーマ②：食品ロス

全体として、１週目と同様の流れを繰り返す。ただし、活動の際、**教師主導の割合を減らしていき、**参加者が自分でやり方等を考えてできると実感できるようにする。 **⇒汎用的な能力へと発展する基盤づくり**

Ⅲ　実践の結果

●目的①：日本語運用能力・コンピテンシーは向上したか

・自身の変化に基づき日本語能力とコンピテンシー向上を実感するコメントが多かった。

アンケート結果（５件法・自由記述）

設問：ジェンダーギャップと食品ロスの授業はコンピテンシーや日本語コミュニケーション能力を高めるのに役に立ちましたか。

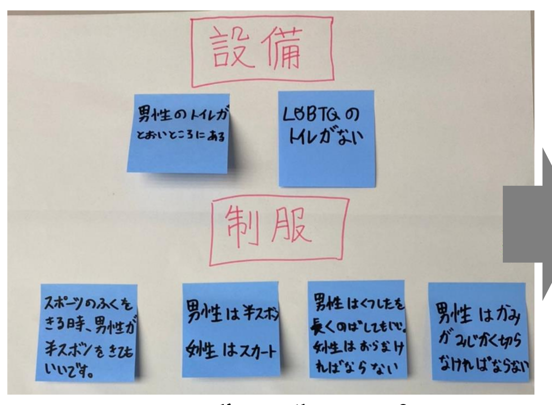
とても役に立った	まあ役に立った	どちらとも言えない	あまり役に立たなかった	全然役に立たなかった
21名（70.0%）	8名（26.7%）	1名（3.3%）	0名（0.0%）	0名（0.0%）

<日本語運用能力に関して>
- 活動はよく小さいグループで話して、**自分の意見を言った**ので、前より自信がついた。
- **場面、課題、疑問があるから**、考えてコミュニケーションできた。
- **相手の気持ちを大切にして**コミュニケーションの流れがよくなった。

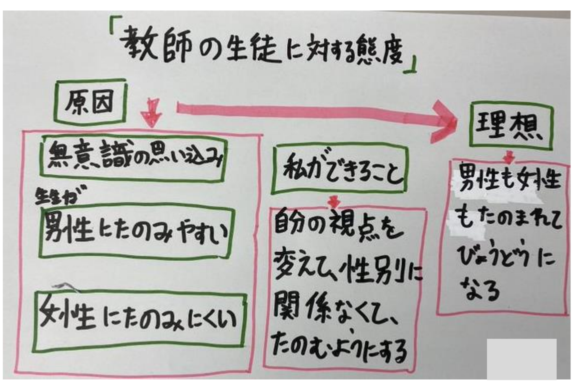
<コンピテンシーに関して>
- たくさん考えてシェアしたから**思考能力が伸びた**と思う。
- 研修から**考える方法**をもらった。
- 研修の活動は**考えさせる活動が多くて思考能力**が育成された。

学習の様子（思考能力・問題解決能力育成における可視化する活動例）

職業のジェンダーギャップ
①職業名を付箋に書き、従事する人の多い性別により整理
②グラフ上に並べ職業の特徴を考えた



学校のジェンダーギャップの問題
①実生活を振り返り問題だと感じることを付箋に書いた
②問題を整理してカテゴリー化した



問題を解決するためにできること
①高校での問題の現状・原因と理想を図示
②理想の実現に向けて自分ができることを考えた

●目的②：CBLについての理解が深まったか（イメージ形成ができたか）

- **研修開始前に比べ、CBLの授業のプロセス、育成方法、教師の役割等について具体的なイメージが形成されていることが窺える気づきがあった。**
- **一方で、CBLが初めてであることに起因する負担を感じる声もあった。**

テーマと時間配分について見直しの必要性が示唆された

アンケート結果（研修の感想）

- コンピテンシーを育成するのは難しいことがわかって、**生徒の気持ちが分かるようになった。**生徒のコンピテンシーを育成したかったら、**何回もやらないといけない。最初(１週目)はとても大変**だった。
- **SDGsはむずかしかった**ですが、**おもしろい活動がたくさ**んあります。

学習の様子（日々の「学習の振り返り」）

日々の授業の後に宿題として「学習内容」「教え方」について振り返りを実施。
「教え方」についてのメモ欄には、以下のようなコメントが見られた。

教え方についてのメモ（原文ママ）

【授業のプロセス】
- クラスではまず生徒にテーマの意見についてを聞いて、正しいことがまだ出なくても大丈夫です。自分の経験を思い出しながらタスクをして、ストーリーを見るや、聞く前にどうなるなどを想像しながらやってみて、そのストーリーが終わったからまたします。**ポイントは最初自分の考えは正しいだけではない、間違っても大丈夫です**。
- データをインプットするとき、とてもいいです。**ゆっくり質問して、学生が知っていることから新しいことまでstep by step**で安心です。

【コンピテンシーの育成方法】(思考能力、技術応用能力)
- グループで考えて、ふせんを大きい紙に**行動と意識に分類して貼ること**。Thinking、Reflection、Communicationのコンピテンシーを使う。
- クループで一緒に考えて、調査を調べて、**どんなキーワードで使って調べるのは技術応用能力が伸ばす**と思います。

【教師の役割】今日の**一番難しい活動は情報を集まる**ことです。私のメンバーが早く情報を見つけましたが、私は検索しても知りたい情報が出なかった。知りたい情報を集めるスキルはとても重要なスキルです。**教える時に、もし生徒が集めることができなかったら、私は生徒に手伝うかどうかわかりません**。結局、自分の知りたい情報を発表じゃなくて、出た情報を発表にするかもしれない。

Ⅳ　今後の課題

研修前半（第一段階）から研修後半（第二段階）にかけての

❶CBLへの理解深化の過程・結果
❷CBLの理解を促すために効果的であった活動

} 分析・考察

参考文献

国際交流基金（2022）「国際交流基金　日本語教育 国・地域別情報 タイ（2022年度）」 <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2022/thailand.html (2024.1.8閲覧)

国際交流基金日本語国際センター（2015）『21 世紀の人材育成をめざす東南アジア 5 か国の中等教育における日本語教育―各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト―』pp.17-20、pp.34-39

白井俊（2020）『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来―エージェンシー、資質・能力とカリキュラム―』pp.1-78

中尾有岐（2016）「21世紀型スキル育成を目指した学習者体験型教師研修―タイ人中等教育教師の気づきと学び―」『国際交流基金日本語教育紀要』Vol.12

謝辞 本研修を共に企画・実施した国際交流基金バンコク日本文化センター主任講師のPrapa Sangthongsuk氏、専任講師のArpaporn Naosaran氏、Narisara Thongmee氏、Rasa Sevikul氏、Preyawan Phositlimpagul氏に、心より感謝を申し上げる。